

reading of volume

末葉の宿り
旅人の一夜の宿
老いたる蚕の繭

1/1000



YOUNG

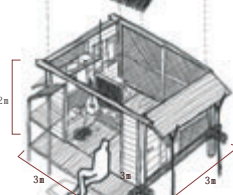
OLD

BIG

SMALL

手の届く距離、呼吸の音が反響する大きさ／自己の延長

まず最初に、「万丈の庵」の概要が記述される。「旅人・一夜」という言葉で仮設住居であることと、「年老いた蚕」という言葉で個人で住まう極小の住宅であるということが理解できる。年々歳を重ねるごとに家が小さくなってゆき、最後には3m×3m×高さ2mという極小空間に行き着くことを描く。この大きさと、いや小ささとはいかにするヴォリュームなのだろうか。



田舎は災厄などの自然災害の恐れもなければ、人と人との係どの精神の煩悩も存在しない、自分一人だけの精進や水も自分で調達し、木々や川の音や花や月を話し相手とする。

生活リズムは太陽の傾きと天気によってのみ決定し、呼吸や鼓動の音が反響するほど四方壁は迫る。所有するすべてのモノに手が届く、自己を認識しに適切な大きさである。これだけの小ささでも生活空間の一部が外部に染み出し、内外を行き来する動作で外気や自然に接する時間が増え、人間は影響する生活環境が豊かになる。

軟らかくて軽い素材と硬くて重い素材のバランス

土居
うちおほい
継目
掛け金
車二両

構造分析
基本的な構造はいかなるものか

仮設性分析
どのようにして選んでいたか
その重さは？その多さは？

材料分析

軽く、持ち運びがしやすく、
一人で作りやすく壊しやすい
しかも5年間住み続けられる
強さを持つ材料の組み合わせ



『方丈記』が書かれた1200年代に一遍上人という人がいた。弘安5年(1282)に鎌倉を訪れるが、その様子を含め生涯を「一遍上人絵伝」に詳しく記述した。

その中には時代の動向や、四季折々の行事などが描かれているが、その背景として描かれている都市の描写が細かく、当時の建築を研究する重要な参考として挙げられる事が多い。本論でも同様に、これら絵巻の背景にフォーカスをあて分析を行なうと、「方丈の庵」復元において大きく参考になる点が見られた。

まず普通の一般家庭の造りに注目したい。路肩に露店のように並ぶ家がこの頃の庶民住宅 (fig.06) だが、小さいとは言え、垣 (fig.07) が設けられ、一部に竹を編んだ壁が見られる。この竹壁は軽くて比較的丈夫で安価であるため、庶民階層まで広く使われていたことが予想される。

詳しく見ていくと、見落としそうなほどの絵の端に、乞食が描かれているものがある (fig.08)。乞食もホームレスのダンボールハウスのように簡単な拠り所を構えているが、それらはすべて板を重ね合わせたものを、枝で支えて雨風のうへ領域を作り出している。これらの板が規格品であったことが分かる。

板壁
1400×1000mm

部戸
1400×1000mm

竹壁
1400×1000mm

竹簾
1400×1000mm

板壁・竹壁＝50：50

質量：重い
厚み：厚い
強度：強い

ベーシックな軸組み構造+板材を軽くするための増材

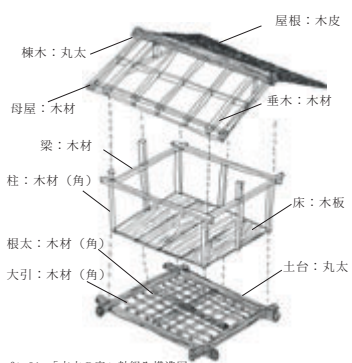


fig01.「方丈の庵」軸組み構造図

ヴォリュームや家というものの概念を述べた後、この部分では家を建てる場所性に関しての記述がある。「土台」「うちおほい＝屋根」「継目」などの表現から基本的な軸組み構造であることが分かるが、土台があるということから、地面よりやや高いところに、根太や大引を組み、床を張っていたことが分かる。

床はこれらの構造の中でも比較的大きな部材になり、長辺は3mあったので一人で組立て壊すのは中々困難な大きな部材になることが予測される。この板材を薄くするために、根太は通常の本数より多めに入れられたと思われる。屋根に関しては同様のことが言える。柱同士はホゾで組み合わせられ、壁は掛け金によって留められたが、その構造に関しては仮設性分析で説明する。

老人一人で建設・解体できる仕組み／建設中のフレキシブルさ

□式年遷宮との関係

長明は現在の下れた神社（元の賀茂御祖神社）に生まれ、下鴨神社は御1年に1度、年遷宮を行うことが知られ、7歳の時に第6回式年遷宮が行なわれ、幼い頃から宮の様子を幼い頃から目に焼き付けてきた長明は、幼い頃からヒントを得て「方丈の座」の構造を考えたのではないという仮説の元に、検証をしない。



Fig02. 札の森（世界遺産）



「方丈の庵」は広さ約二・七三坪。畳、約五帖半程度であり、間口・奥行とも一丈四方である。もう一つの特徴は、土台を置き、その上に柱を立てるという点だ。下鴨神社の本殿もまた土居桁の構造である。この構造は、建物の移動ということを前提としている。

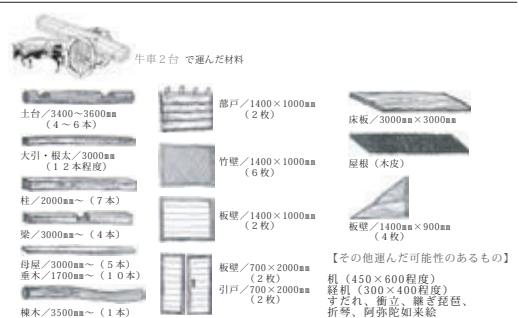


fig03. 河合神社（下鴨神社摂社）



掛け合いという仕組みがもたらす効果は何か、まず組み立てが順次で一定に絞られないことにある。一人で組み立てるということは作業を一定の間に仕舞い込めることを要しているがいないことになるので、例へば柱に柱を立て、その両側に直向に壁をつけて置くこと、その状態で固定しておくことが出来るだろう。材料の上で上下運動が最大限で済むのもまた高層の建物の場合、限られてくるので、掛け金方式によって、建設途中で最も大きな箱を簡単に壊すことができるので、建設過程でフシギルに対応していた様子を想像することが出来ることはとても便利。

長方形の箱を選び、数段を積み込んだら壁や窓の位置を決定して、分析を断つてはいいけれども、それはないかと仮定してより創造的な分析



【その他運んだ可能性のあるもの】
機（450×600程度）
経机（300×400程度）
すだれ、衝立、簾、琵琶、
折琴、阿弥陀如来絵

平面・しつらえ分析

思いつきで徐々に加えたしつらえが方角性を明瞭化する

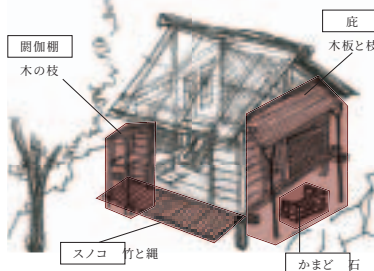


fig01. 建ててから追加したしつらえとその素材

前部分で基本的な構造やポータビリティに関して述べたが、ここでは具体的なしつらえが描かれている。インテリアの固有名詞が数多く書き連ねられ、リアルな空間の雰囲気や生活の様子が思い描かれる。しかし東西南北でのみ整理されているので、長明は平面図に頭を思い描きながらこの描写をしていたと思われる。

最初の部分に「日野山の奥に住んでから」という記述があること、軸組みなどの記述と分けて書かれていることからこの部分で登場するモノは、長明がこの場所に庵を構えてから加えられたしつらえであると思われる。

思わず長く住むことになってしまったために、方丈という立方体から床や屋根が外部に侵食し、内部でも外部でもない二種類の半外部空間を作り出し、お互いの性質や方向の理などを補い合い、より豊かな生活空間を巧みに仕立て上げたと思われる。おそらく思いつきで増やしていった空間だが、この半外部空間がより方角性を明瞭にしたと言える、長明の建築センスが垣間見える。

火と水と、祈りがあればそれでよい

これまで「方丈の庵」の大きさ・構造・材料・仮設性・平面・しつらえに関して詳しく述べてきたが、ここでは建物から外へ出て周囲の環境に関して描写する。ここでは見渡せる半径10m程度の範囲の話が記されていて、隣接する山などのマクロな描写はこれ以降に書いている。

ここで暮らしていくためのものとして、最低限の要素である火と水が得られることが示される。周囲に広がる林から火を起こすための薪が拾えること、水が南側の小川から掛樋を使って溜めておくことが出来たことで、ある程度の期間の命が保証され、ここでの暮らしの継続への不安が取り払われる。それらの要素もあり過ぎず程々にあるのがまた絶妙である。

火と水に加えてあるのが西方への視界で、西は極楽浄土を含む特別な方角であった。地形的にも西のみが開けることで夕暮れを望み、月を想うことが出来る。火と水に加え、祈りの方角を最低限の環境として読み込んでいる点が興味深い。

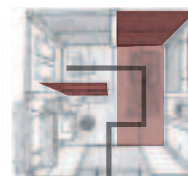
fig02. 文章から読み取れる周辺環境の描写



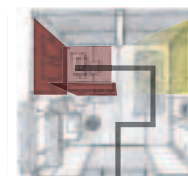
□仕切り・面について



手前／書斎と台所
正面から西に机を置き物を集中させ東側に庵を設ける。動作の大きいアクティビティを手前に集めている。

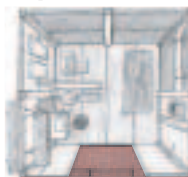


半奥／寝床
半分奥まり適度に囲まれ落ち着く。ほどろを敷いただけなので、折り畳めばアクティビティが行なえる。

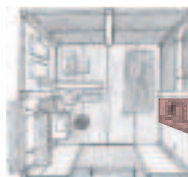


最奥／仏間
一番先に仏間を設ける。仏がいる方向である西を向き、朝陽が東の廊戸から伸びてきて仏間の床を照らす。

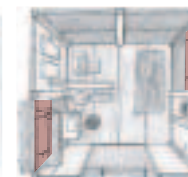
□窓について



スノコ／床の延長
正面の床を延長し、中へ入るとい行為にワンクッションを持たせる。また1日の大半をこの場所で過ごしていたのではないかと推測される。



庇／屋根の延長
屋根を延長し、雨の日も土の上で作業が行なえる土間の空間を設ける。屋内では行なえないが毎日必ず行なう炊事機能を担う場として使用。



廊戸
小屋の両端に廊戸を配置。両側を開けると東側の山の上から、西の谷に向かって流れる風が入る。特に西側は見晴らしもよく月を眺めていた。



fig03. アプローチ



fig04. 方丈石

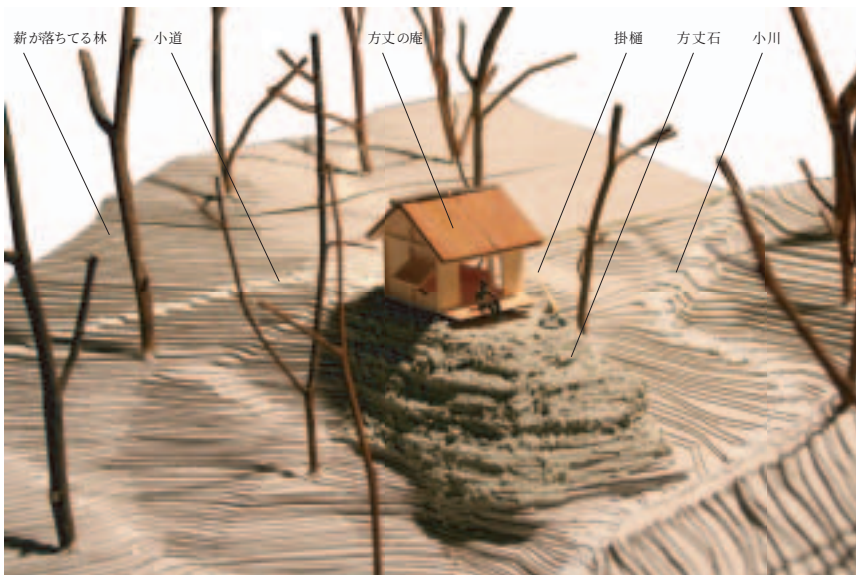


fig05. 方丈石上部



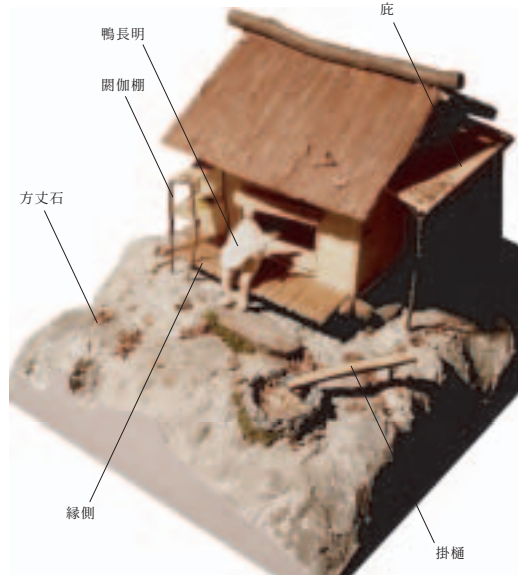
fig06. 方丈石裏側

文学より立ち上げた「方丈の庵」による検証



S=1:100 復元模型

周辺環境との距離関係、長明が紆余曲折した人生の中で最終的に自分の家の敷地として選んだ方丈石の特異な場所性を発見した。



S=1:20 復元模型

長明が一生の最後を過ごした庵での生活の様子、描写には表れなかった空間構成の巧みさが浮かび上がった。また、庵の中や周囲で様々な時間的変容が現象として現れていたことも発見された。



縁側で過ごす日中



軒が落ち葉で埋まる



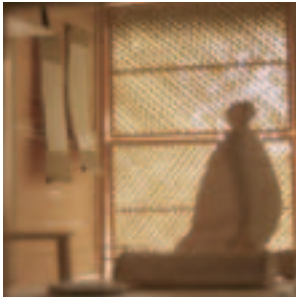
地面と庵の間(土台)に苔が生ず



縁側で籠に住む子どもと遊ぶ



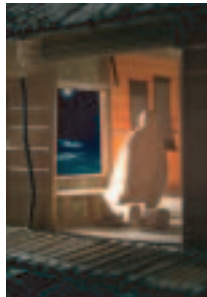
引戸を開けると台所



仏に祈る朝は素材の隙間からもれる光で満ちる



掛樋へ流れる水の音が聴こえる



静まった夜に月を想う

PROJECT2

「出来事や現象から空間は作れるか」

「出来事から設計すること」

- ・窓を開ける
- ・棚を引出す
- ・背伸びをする
- ・半歩横にずれる
- ・視線を上げる
- ・数ミリの段差を上げる

・・・小さいからこそ影響する出来事



小さな窓を開けると質が変わる

視線が変わると奥行が変わる

扉が底になり、窓が入口になる

「時間的変容による現象」

ここは、自然の匂いや音や温度や湿度や風や雨などの時間の流れを感じながら太陽の傾きと共に生活する場所

				夜明け前 辺りは暗く、月の光のみが空間を照らし波の音が遠くから聴こえてくる
				夜明け 小鳥がさえずりだした頃、水平線が徐々に明るくなっていき空間と共に自分の温度も暖められていく
				早朝 目を覚まししばらく起き上がらず、少し高くなった光が降ってくるのをぼんやりと眺める
				朝ご飯 太陽が上がりきり、空が青くなった頃、質素な朝食を作り、部屋中ごはんのにおいが立ち込める
				正午 太陽が真上にきた頃誰かが来る。人が来る音とともに気配を感じる
				午後 雲行きが怪しくなり雨が降ってきた。雨音とともに雨の匂いが広がる
				夕暮れ さっきまで降っていた雨はあがり、夕日で部屋中が赤く染まっていく
				夜 日が落ちると共に行動範囲が狭くなり、波音を聴き月明かりで本を読み、その日の出来事を思い出しながら今日が終わる

